



絵本作家 松田 奈那子さん

絵本作家のほか、画家としても活動。荒川区からの依頼で、食品ロスでテーマにした絵本「あらペンのおねがい」を区内の保育士とともに制作。

私が生まれ育ったのは北海道なのですが、平成29年から荒川区に住んでいて、自宅はアトリエを兼ねています。

絵本作家を志したのは、学生時代の造形教室でのアルバイトがきっかけです。教室に通う子どもたちのお迎えの待ち時間に絵本の読み聞かせをする機会があって、久しぶりに絵本に触れました。そのとき、絵本の奥深さや自由さを感じ、大人が読んでも楽しめて、心に響くものがあると気付きました。それと、元々油絵を描いていたので、絵に何か言葉を添えることで絵本にできる、ということが、自分の中の世界を広げられるように感じて、挑戦したのが始まりです。

「あらペンのおねがい」では、一人ひとりが世界中のさまざまな人とつながっていて、それぞれの小さな行動が積み重なり、大きな力となって変化が生まれる、という内容を描きました。実はこの絵本の制作は、近

所のお店の方や尾久図書館の方を通して縁がつながり、実現しました。ほかにも、劇中画を担当した映画の原画展を開催したときは、また別の近所のお店の方がギャラリーを紹介してくださったり、ギャラリーの方が車いすのお客さんが来場しやすいようにと、介護関係の方に相談してくださったり。どこからどう生まれるか予想できない縁でつながっていくことが多くて、驚きつつも、その温かみに感動しています。

荒川区は、昔からあるものと新しいものが、とても調和していると感じます。昔から住んでいる方が新しく住み始めた方を受け入れる、そんなフレンドリーさが素敵です。

今年は絵本作家になって10年を迎えるので、自分の表現したいものや絵本で伝えたいことをもっと掘り下げて、表現の幅を広げていきたいと思っています。また、ワークショップ等の対面のイベントも実現させていきたいですね。

第二日暮里小学校 4年生、2年生 呉 颯真さん、明奈さん

空手の大会で優秀な成績を収めている。令和3年度荒川区教育委員会褒賞を、兄妹そろって受賞。



颯真さん：僕は小学校1年生のときに、本格的に空手を習い始めました。

今は自分の癖を直すことや動きを素早くすることを特に意識して、練習しています。「形」はカッコいいところが、「組手」は相手と直接戦えるところが好きです。新型コロナの影響であまり練習できなかったときは、トレーニングとしていつも5km走っていて、上野公園まで走ることもありました。妹の明奈は、普段は面白くていつも笑わせてくれるけれど、空手の試合になるとしっかり切り替えができて、スイッチが入るところがすごいと思います。

荒川区の好きなところは、公園が多いところで。運動や遊びができるところがたくさんあるので、よく友だちや明奈とみんなで、鬼ごっこしたりかくれんぼしたりしています。

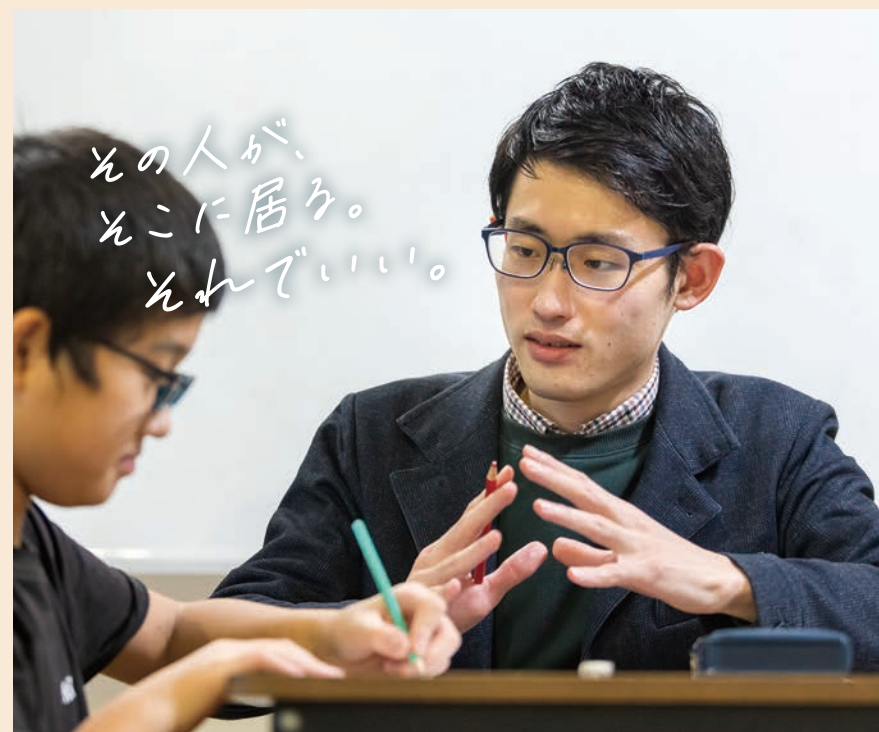
今の目標は、形も組手も、関東・全国大会でメダルを取ること。将来もずっと続けて、強い選手になりたいです。

明奈さん：私は、兄の颯真が空手を習っている様子を見て、カッコいいと思って始めました。

形と組手なら、組手の方が好きです。ただ、この間参加した大会は男女混合で、相手の男子の攻撃が力強く、びっくりしました。でも、負けたくなかったので、途中から頑張って反撃しました。練習は疲れるときもあるけれど、勝つためにきちんとやるときはやる、と決めています。

颯真は優しいです。空手をしているときは、真面目で、組手が強い。一緒に練習したり、家でも空手の話をしたりします。学校は楽しくて、みんな仲良し。授業も好きです。

将来は、カッコいいシェフが英語の話せるパイロットになりたいけれど、今は空手を一生懸命頑張ります。去年は関東大会の組手で兄妹どちらも銅メダルだったので、次は関東・全国大会で形も組手も兄妹一緒に金メダルをとりたいです。



なにかし堂・店主 野口 貴裕さん

子どもから高齢者まで集まる、街の図書館「なにかし堂」を運営。子ども向けの学習塾等も兼ねている。



私は和歌山県出身で、なにかし堂を開いたのは、令和2年の4月ごろでした。元は教員たちの悩みを共有する「居場所」として準備をしていましたが、コロナ禍で気軽に外出できない状況になって、開設が難しくなっていました。ですが、せっかく商店街にあるのだから、教員だけでなく、いろいろな人に来てもらおうと考え、思い切って開設しました。すると想像以上に多くの方が来てくださり、さまざまな悩み等を聞く中で、地域全体に開かれた場所になっていったように感じます。

なにかし堂には「その人が、そこに居る。それでいい。」という理念があります。そのため、来た方がどう過ごしたいかを観察し、ともに過ごすことを大事にしています。開放的な場にしたいくて、図書館という形はありますが、過ごし方は自由です。最近は、ピアノを一人で弾いて満足そうに帰るおばあさんがいます。私たちは何もしていないけれど、その方にとってはここが居場所になっているのかな、と感じますね。

特にやりがいを感じるのは、子どもたちなりに抱えるストレスがここで解消されていく様子を見られたときです。また、「ここがなかったら困る」という声をもらったときにも、誰かの居場所になっていることに気が付き、やっていてよかったと思います。

荒川区のいいところは、義理人情を重んじるところ。例えば回覧板を回すとき、それが世間話等のコミュニケーションを取る機会になっているところに、下町らしさを感じます。

今後は、商店街全体を巻き込んで、子どもたちが実践的な学びを得られる環境を作りたいです。また、家から出るハードルが高い子たちの居場所作りもしていきたいですね。



株式会社 富士製額・額縁職人 栗原 大地さん

荒川区が実施する、伝統工芸に興味のある若者をサポートする「匠育成事業」を修了。現在、額縁職人として活躍中。

荒川区には約11年前から住んでいます。元は服飾デザイナーを目指していましたが、美術館で絵画を見ていたときに、「洋服が人を飾るように、額縁は絵を飾っている」と、ふと気が付き、額縁に興味を持ちました。その後、富士製額を見学する機会があり、「こんなに大規模な額縁の製作所があるのか」と衝撃を受け、入社を決めました。最初は不安でしたが、師匠から技術を吸収して、できることが増えるほど励みになりました。

匠育成事業では、区内の若手職人さんとのつながりができました。私は単身で職人になりましたが、家業を継いでいる方もいるので、そういった方たちの考えから新しい気付きをもらえて、切磋琢磨できる関係です。私たちが作る額縁はオーダーメイドのため、型にはまったような正解はありません。自分なりのイメージを具現化することは、職人としてのやりがい

ですね。例えば、経年変化した様子をあえて新品の額縁で自然に表現するとか。

額縁は、中身の作品とともに注目を浴びているはずなのに、額縁自体は目立ちすぎず、中身の作品の引き立て役になる。目立つくせに目立たない、その矛盾が面白い。でもやはり、額縁だけ見てもカッコいい、というものを作ることにこだわっていますね。

荒川区は、刺激的とも落ち着いているとも捉えられる街だと思います。歩いて通勤しているときに新しいアイデアが湧いたり、気持ちが安らぐような公園が多かったり。雰囲気が心地よいです。

自分の活動を通して、額縁の魅力や富士製額でしかできないことを多くの方に知ってもらえたら嬉しいです。そのために、これからも新しいことに挑戦し続けていきたい。この仕事も会社の人も大好きなので、みんなで盛り上げていきたいです。

